

国境地域における歴史認識をめぐる戦略

——イタリア・南ティロールの事例——

和洋女子大学国際学類 秦泉寺友紀

1. 目的

オーストリアおよびスイスと国境を接するイタリア北部に位置する南ティロールは、イタリア系、ドイツ系、ラディン系の住民が暮らす複数言語地域で、第二次世界大戦後はトレンティーノ＝アルト・アディジェ特別自治州として、普通州より多くの権限がイタリア政府から委ねられている。また 1990 年代初頭からは、EU の枠組みのなかで、オーストリアのティロール州と「ユーロ・リージョン」を形成し、国境を越えた地域協力を活発化させるなど特徴的な性格をもつ。

本報告では、南ティロールにおける 1945 年の「解放」をめぐる近年の歴史認識を検証する。この地域は、20 世紀前半の戦間期からファシズム期にかけて、二度にわたる大戦を背景に、オーストリア、ドイツ、イタリア間で国境が変更され、争点となった。住民間の軋轢も、下火とはいえ今なおみられる。通常の戦後イタリアの歴史認識では、反ファシズムのレジスタンス運動による「ナチファシズム」からのイタリアの「解放」が戦後の共和制イタリアの礎と位置づけられてきた。それに対し、近年の南ティロールでは、イタリアにおける一般的なそれとは大きく異なった「解放」をめぐる語りが浮上している。本報告は、そうした南ティロール独特の「解放」をめぐる歴史認識が、この地域における住民の共生にいかなる地平を開き得るのかを示すことをめざす。

2. 論点

上記の目的を踏まえ、報告では 3 つの論点を取り上げる。第一に、20 世紀以降の南ティロールの国境をめぐる展開を跡づけ、その性格を捉え直す。第一次世界大戦を経てオーストリア＝ハンガリー帝国領からイタリア王国領となり、その後も国境のあり方が争われ続けたこの地域からは、国境が線というよりは、一定の広がりをもつ地域として立ち現われること、またそれが障壁でありながらも多孔的で、時に透過的であることが浮かび上がる。

第二に、特別自治州を構成する 2 つの自治県のうちのひとつ、ボルツァーノ県で、欧州議会の後援を得て 2011 年より開催されている「解放記念日」の関連イベント（「現代の諸レジスタンスのプラットフォーム」）における「解放」をめぐる語りをみていく。ここではイタリアにおける一般的な「解放」をめぐる語りとの相違、とくに「解放」が「ナチファシズム」からではなく「中央集権的な政府」からのものと意味づけられていること、またレジスタンスが複数形の「諸レジスタンス」とされていることがもつ意味に焦点を合わせ検証する。

第三に、こうした「解放」をめぐる南ティロール由来の意味づけがいかなる前提のもと可能になったのか、またこうした歴史認識がこの地域にとっていかなる可能性をもつのかをみていく。第一の論点とも一部重なるが、南ティロールは中央政府からみれば辺境である一方、国境線の向こう側の人々との交流に関しては最前線に位置し、中央政府間の交渉に基づいて引かれる区分けとは別の共同性が歴史的に存在してきた。「解放」をめぐる南ティロールの意味づけが、そうした共同性に依拠する共生に親和的であることを示したい。

文献

Bernardini, Giovannim Pallaver, Gunther, 2015, *Dialogo vince violenza: La questione del Trentino-Alto Adige/Südtirol nel contesto internazionale*: Bologna, il Mulino.

D'Amelio, Diego, Di Michele, Andrea, Mezzalira, Giorgio, 2015, *La difesa dell'italianità: L'Ufficio per le zone di confine a Bolzano, Trento e Trieste(1945-1954)*: Bologna, il Mulino.